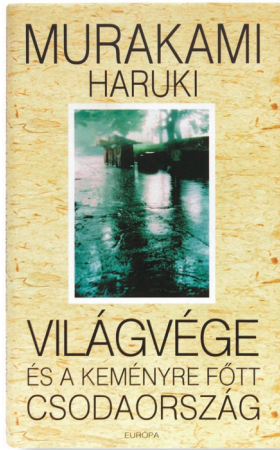


# ハンガリー語翻訳への 熱い想い



「春樹をめぐる冒険——世界は村上文学をどう読むか」のシンポジウムで表紙カバーについての説明をするエルデーシュ氏（右）と自ら翻訳した村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』



エルデーシュ・ジョルジュ ●1944年ブダペスト生まれ。82年ブダペスト国立大学文学部卒業、文学博士（ハンガリー文学・言語）。NHK東欧地域顧問、ヨーロッパ出版社の翻訳家、ハンガリー政府観光局東京事務所局長等を歴任。04年より港有限会社代表。69年よりこれまでに新聞、雑誌の記事・論文等130本、夏目漱石、三島由紀夫、村上春樹の作品5冊を翻訳

撮影：高本厚子

## Person Erdős György

エルデーシュ・ジョルジュ

# 今

年3月の国際シンポジウム「春樹をめぐる冒険」。15の国と地域から集まった20人の翻訳者・評論家を、ほころび始めた桜の花とのべ750人の聴衆が迎えた。専門家たちが村上作品や翻訳について語る想いは、まさに二十人二十色だった。

ハンガリーと日本を歩き来して、通訳と翻訳の仕事が続けるエルデーシュ・ジョルジュさん。通訳の仕事を通して知り合った日本人から偶然教えてもらった『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』を翻訳し、これがハンガリーで出版された初の村上作品となった。読み始めるとすっかり引き込まれ、出版社のオファーがくる前から、独自に2年間かけてこつこつと翻訳したという。自ら設立した通訳・翻訳の会社に「港」という名前をつけた。東京の港区に住んでいたというのが由来だそうだが、「港というのは、さまざまな船や人が集まり、つながる場所だから」と、仕事に対する想いも込めている。

国籍も世代もさまざまな参加者たちのなかで比較的控えめな存在だったが、いったん話し始めると独特のユーモアで場を和ませ、真摯な語りで参加者と聴衆の心をつかんだ。文芸翻訳では文化的な意味の違いを考慮して文字通りに訳さないこともあるが、「文学という嘘は世界で一番おもしろい嘘ではないかと思う」と翻訳への熱い想いを語った。春樹をめぐる冒険は、参加者一人ひとりが主人公の冒険でもあった。

シンポジウムに続く山中湖での合宿。小さな浴衣と草履から大きな体をはみ出させ、ゆつくりと温泉場に向かう姿が印象的だった。日本とハンガリー、二つの港を悠然と行き来する、まさに船のようだった。

（加藤 昌）